

2026年3月

Wildwood Trust

事務局長 ポール・ウィットフィールド 殿

ワイルドウッド・トラストにおけるオオカミ群れの安楽死処分に関する抗議 および提言

私は一般社団法人日本ドッグビヘイビアリスト協会（JDBA）代表理事の田中雅織と申します。応用行動分析学および動物行動療法を専門とする立場から、2026年3月25日に貴施設において実施されたオオカミ5頭の安楽死処分について、深刻な懸念と抗議の意を表明するとともに、その意思決定過程に内在する根本的な問題点を指摘したく筆をとりました。

一、飼育環境の設計における構造的失敗について

貴施設は約40エーカー（約16万㎡）の敷地に200種以上の動物を収容しており、オオカミの区画はその一部に過ぎません。野生のオオカミのホームレンジが数百から数千平方キロメートルに及ぶことを考慮すれば、この空間的制約が行動問題の強力な確立操作（Establishing Operation）として機能していたことは明白です。

今回の5頭—Nuna、Odin、およびその子Minimus、Tiberius、Maximus—が同一の閉鎖空間に長期間同居させられていたという事実は、特に深刻です。Mech（1999）が明確に示したように、野生のオオカミの群れは本来、繁殖ペアとその子からなる家族単位であり、子どもたちは成熟するにつれ自然に分散します。しかし飼育下では、

“captive packs often include members forced to remain together for many years” (Mech, 1999, p. 1196)

という人工的な強制同居が生じます。成熟した雄3頭が分散できない状況に置かれ続けたことは、群れ内部の攻撃行動を増加させる十分な条件でした。Knutson（2017）もまた、飼育下オオカミにおける攻撃行動の増加に、人との相互作用、給餌習慣、および群れのダイナミクスが複合的に寄与することを示しています。

二、商業的人慣れプログラムがもたらした行動上の問題について

貴施設が「ウルフ・フィーディング・エンカウンター」として販売していた体験プログラム—「キーパーと同じくらい近くで、息がかかるほどの距離での手渡し給餌」—は、動物福祉の観点から重大な問題をはらんでいます。

野生動物への慣化（habituation）と真の社会化（socialization）は根本的に異なります。慣化は人間に対する中立的な行動反応をもたらすに過ぎず、動物の警告シグナルを消失させるリスクをはらみます（Giucci and Boitani, 1998）。Bloch and Marriott（2024）がカナダ・バンフ国立公園のパイプストーン・ウルフを5年間観察した研究では、140回の人間との遭遇事例において、一件も人間への攻撃・威嚇行動が記録されませんでした。その方法論の核心は、観察者が常に100メートル以上の距離を維持し、オオカミの行動を一切妨げなかった点にあります。

「rewilding（再野生化）」を掲げながら商業的な手渡し給餌プログラムを同時に運

営することは、認識論的な矛盾です。この矛盾が25年間問われることなく継続されたことは、組織的な批判的思考の欠如を示しています。

三、「福祉的安楽死」という言語的欺瞞について

貴施設の声明は、安楽死を「動物福祉上の最善の選択」として繰り返し位置づけています。しかしこの論理は根本的に倒錯しています。

動物福祉とは本来、動物が種として本来持つ行動レパートリーを発現できる環境を保証することを意味します（Broom, 1986）。貴施設は最初からその条件を満たしていませんでした。分散できない閉鎖空間、商業的な慣れプログラム、行動科学的アセスメント体制の欠如—これらは開設当初からの問題であり、安楽死はその帰結に過ぎません。「これ以上苦しませないため」という言葉は、自らが作り出した苦しみを直視することなく、最終的な行為だけを人道的に見せる機能を果たしていません。

また、「ヨーロッパ全土の著名なオオカミ専門家との協議」および「独立した倫理審査」を経たとされていますが、その専門家の氏名、所属、専門分野、および倫理審査の内容と結論は一切公開されていません。透明性のない意思決定プロセスは、科学的正当性を主張する資格を持ちません。動物行動療法士（Applied Animal Behaviourist）または応用行動分析家が意思決定に関与したかどうかについても、公開情報の範囲では確認できませんでした。

四、要求事項

以上の指摘を踏まえ、以下を求めます。

第一に、今回の安楽死に至るまでの全意思決定プロセス—関与した専門家の氏名・資格・専門分野、実施された介入手段の詳細、倫理審査の内容—を公開すること。

第二に、今回の群れの崩壊において「ウルフ・フィーディング・エンカウンター」に代表される商業的人慣れプログラムが果たした役割を正式に調査・検証し、その結果を公表すること。また、今後いかなる野生動物についても、商業的体験プログラムを設計する際には事前に行動科学的リスク評価を義務づける体制を構築すること。

第三に、今後の野生動物飼育において、応用行動分析学および動物行動学の専門家を意思決定プロセスに組み込む体制を構築すること。貴施設のポール・ウィットフィールド事務局長が「オオカミの飼育を今後続けるかどうか見直す」と発言されていることを踏まえ、その見直しに際して行動科学的知見を取り入れることを強く求めます。

第四に、今回の事案を詳細な事例報告書として公表し、同様の悲劇を防ぐための知識を野生動物施設コミュニティと共有すること。

Odin、Nuna、Minimus、Tiberius、Maximusの5頭の命は、もう戻りません。しかしこの事案を正直に総括し、制度的な変革へとつなげることは、今後の命のために貴施設ができる最低限のことであると考えます。

誠実かつ真摯なご対応をお願い申し上げます。

田中 雅織

代表理事

一般社団法人日本ドッグビヘイビアリスト協会 (JDBA)

参考文献

- Bloch, G. and Marriott, J.E. (2024) *The Pipestone Wolves: The Rise and Fall of a Wolf Family*. Calgary: Rocky Mountain Books.
- Broom, D.M. (1986) 'Indicators of poor welfare', *British Veterinary Journal*, 142(6), pp. 524-526.
- Ciucci, P. and Boitani, L. (1998) 'Wolf and dog depredation on livestock in central Italy', *Wildlife Society Bulletin*, 26(3), pp. 504-514.
- Knutson, C. (2017) *Influence of time spent in captivity on aggressive behaviors of gray wolves (Canis lupus)*. Undergraduate thesis. Bemidji State University.
- Mech, L.D. (1999) 'Alpha status, dominance, and division of labor in wolf packs', *Canadian Journal of Zoology*, 77(8), pp. 1196-1203.
- Smith, D.W. and Stahler, D.R. (2003) *Management of habituated wolves in Yellowstone National Park*. Yellowstone Center for Resources, National Park Service.